

# 須賀先生のこと(佐藤信夫教授 須賀昭徳教授 退職 記念号)

著者名(日)	金子 大
雑誌名	山梨学院大学法学論集
巻	74
ページ	7-9
発行年	2014-07-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1188/00003021/">http://id.nii.ac.jp/1188/00003021/</a>

## 須賀先生のこと

金子 大

須賀先生といえ、私としては「読書」と「長距離」とが連想されます。

一見脈絡のなさそうな二つの要素ですが、後者が長距離通勤を意味するというのであれば、関連性が浮かび上がってくるでしょう。そう、とにかく先生は読書がお好きでした。本自体が好きだったのかもしれませんが。あるいは長距離通勤の故かもしれません。同時に相当の速読家だったと思います。通勤の片道で一冊の文庫本を読了するくらいではなかったでしょうか。先生の該博な知識の多くがこうした読書から得られていたのではないかと拝察されます。とくに太平洋戦争を中心とした第二次大戦に関連する文献を好まれていたように思います。戦争に関しては、それこそ博覧強記の人といってもよいでしょう。

その「長距離」とはどの程度のものか。正直いって相当です。自宅が千葉県野田市所在ですから、都心を通過しての一都三県に跨る大移動となります。着任後しばらくは大学近辺にアパートを借りて寝泊まりしていたこともあると聞いています。しかしその後はもっぱら自宅に帰るようになり、その往復の反覆だったそうです。なぜそこまですで自宅に執着されたのか。その理由は定かではありません。推測によれば、美しい奥様の許にいち早くたどり着きたかったのではないのでしょうか。会議等が長引き、終業が遅くなるのに加えて同僚同士の飲み会のあった日の翌朝で

あっても、何事もなかったかのように微塵の疲労感も見せず、莞爾として現れるのでした。

その通勤路線は、単一の線区ではありません。自宅から最寄の私鉄駅まで自転車、その駅から常磐線の接続駅まで私鉄、常磐線で日暮里まで、そこで山手線に乗り換えて新宿、新宿で中央線特急列車に乗り石和（現石和温泉）または甲府まで、一駅各駅停車で大学最寄駅、という順路です。私であれば到底耐えられない乗換回数です。しかも常磐線の通勤時間帯の混雑というのは、筆舌に尽くし難いものがあるらしいです。計算していませんが、幾星霜を重ねた延べ通勤距離は、それこそ地球何周分の距離なのでしょうか。

本学への着任が一九七六年ということですから、先生は三十七年間にわたり中央線の長距離列車を利用されてきたことになります。恐らくそこまでの長距離通勤などするはずもないだろうという気楽な第三者としての私、加えて実家が中央線の武蔵小金井近辺で小さい頃から鉄道に多少興味のあった私としては、四十年近くもの長きにわたり中央線の変遷を目の当たりにされてきた須賀先生は、羨ましい限りです。一九七〇年代中葉といえば、ディーゼルの急行がまだ走っていたかもしれませんが（「アルプス」。「かいじ」は一六五系使用の急行だったと思います。オレンジ・緑塗色の電車で、夏季等の臨時列車用として九〇年代前半まで使用されていたように思う。かいじがいつ特急列車になったかは記憶していません。「あずさ」は、東海道線の旧特急「こだま」のような車体の電車でした。中央線の列車始発駅は原則として新宿であって、普通列車の多くも新宿始発でした（普通列車に関して現在は最も都心寄りで立川となりました）。普通列車には電車だけでなく、電気機関車牽引の客車列車も含まれていました（下りの最終は、一九七五年三月九日の新宿発松本行だったと思います）。機関車は記憶によればEF六四です。もっと古い時代の旅客列車の機関車は、のちに調べて判ったのですが、甲府機関区所属のEF一三が多かったよう

です（冬季には暖房車を連結し、客車に暖房用の蒸気を送っていた）。

須賀先生のことを口実に、中央線にまつわる記憶等について書いてしまいましたが、そんなことはどうでもいいことです。要するに先生は、これだけの長距離を移動して来られて、大学で講義を担当し、会議をこなし、さらに裁判所等外部で役職等を務め、しかもそれを連日反覆するというのは、並大抵のエネルギーでできることではないと思うのです。常に学生に大いなる情熱・熱意をもって対応する須賀先生の姿があつたものと強く思われます。

そういう観点から、現在はさぞかし疲労も蓄積されているのではないかと危惧されます。依然として母校の大学の非常勤や裁判所の調停委員の仕事もお忙しいと聞きます。くれぐれも健康を害されることのないよう、ますますお元気で過ごされるようお祈りいたします。私としては、今度お会いしたときには中央線に関する鉄道話を伺いたいです。